学校通信
心磨（しんま）
サニオン
（マスコットキャラクター）
三豊市立仁尾中学校
令和７(2025)年
７月１日(火)
● 第４号 ●

沖縄での平和学習で考えた命について

３年生が６月２日～４日、沖縄に修学旅行に出かけました。今回の修学旅行の目的の一つに「日本唯一の地上戦が行われた過去を顧みることによって、平和の尊さを学ぶ」とあり、旅行１日目に平和学習を実施しました。那覇に到着後、ひめゆり平和祈念資料館の見学、その後、平和祈念公園に移動して平和集会、最後に糸数壕をガイドしてもらいながら見学しました。過去二年間の先輩たちと同様に、子どもたちは資料館見学において、展示物の写真や、当時のことを語っている映像を真剣に見学している姿が印象的でした。自分たちと同じ中学生が戦地に駆り出され、その多くが犠牲となり、命を落としたという事実にしっかりと向き合うことができていました。平和祈念公園で行った平和集会では、代表者が以下のような平和宣言を行いました。

私たち仁尾中学校の生徒一同は、この平和の地、沖縄において、過去の悲劇と向き合い、未来への「平和の誓い」を新たにいたします。

今から８０年前、ここ沖縄に米軍が上陸しました。約３か月間、悲惨な戦いが続き、多くの尊い命が失われました。美しい自然は傷つき、人々の心に今もなお深い傷跡を残す戦争とは本当に恐ろしいものだと感じました。

ご飯を食べて、友だちと会い、安心して眠りにつく毎日。それらは決して当たり前のものではなく、先人たちが命をかけて守り抜いてくれたおかげです。

私たちが立っているこの場所には、国籍や軍人、民間人の区別なく、沖縄戦で亡くなられた２０万人の魂が刻み込まれた平和の礎があります。生きたいと願っていても生きられなかった無念さ、生き残られた方々の苦しみを肌で感じました。

今の私たちに戦争をとめることは難しいです。しかし、小さな思いでも願い続ければ、きっといつかは大きな力へと変わります。そして、過去の過ちを繰り返さないために平和のバトンを受け継いでいくことが私たちに託された使命です。

人のあるべき姿は、お互いに助け合って幸せに生きていく未来を築くことです。そのために、私たち一人ひとりができることを考え、行動していきます。

今こうして戦争のない平和な日常を過ごすことができるのは、先人たちの大きな犠牲と努力があったからこそだと沖縄の地で改めて感じました。今回の現地での学びが、自分自身の生き方や未来の社会づくりにつながることを切に願っています。なお、裏面に６月２３日、沖縄県で行われた戦没者追悼式で朗読された小学校６年生の詩を掲載します。ご一読ください。

確かな学力

６月１８日（水）は要請による学校訪問日でした。三豊市教育委員会が、県教委（西部教育事務所）に要請を行い、その双方の訪問を受けて、学校経営や教育活動について指導・助言をいただく日です。私たちは学校訪問の時だけでなく、日常的に教育委員会の管理・指導を受けながら教育活動の充実に資していく立場にあります。また、三豊市からは教育への期待を託されて財政面等での多大な支援をいただいています。それ故に、学校訪問日は学校の取組をしっかりとお伝えし、その様子や子どもたちの育ちをつぶさに見ていただき、その上で私たちに直接指導をいただける重要な機会と考えています。

授業参観後の全体指導では、参観者から「子どもたちが授業を受けている様子を見ると、非常に落ち着いた学校の様子が伺える」「学校の随所に子どもたちの写真が掲示されており、先生方が子どもたちを大事にしているのがよく分かる」等、本校の教育活動を肯定的に評価し、褒めていただきました。今後さらに良くなるための的確なご示唆もいただきましたので、今後に生かしていきたいと思います。

今年の「平和の詩」に選ばれ、戦没者追悼式で朗読された、豊見城市の伊良波小学校６年、城間一歩輝さんの詩「おばあちゃんの歌」の全文です。

毎年、ぼくと弟は慰霊の日に、おばあちゃんの家に行って、仏壇に手を合わせウートートーをする。
一年に一度だけ、おばあちゃんが歌う「空しゅう警報聞こえてきたら、今はぼくたち小さいから、大人の言うことよく聞いて、あわてないで、さわがないで、落ち着いて、入っていましょう防空壕」
五歳の時に習ったのに、八十年後の今でも覚えている。
笑顔で歌っているから、楽しい歌だと思っていた。
ぼくは五歳の時に習った歌なんて覚えていない。
ビデオの中のぼくはあんなに楽しそうに踊りながら歌っているのに、一年に一度だけ、おばあちゃんが歌う。「うんじゅん、わんにん、艦砲ぬ、くぇーぬくさー」
泣きながら歌っているから悲しい歌だと分かっていた。歌った後に「あの戦の時に死んでおけば良かった」と言うから、ぼくも泣きたくなった。
沖縄戦の激しい艦砲射撃でケガをして生き残った人のことを、「艦砲射撃の食べ残し」と言うことを知って悲しくなった。
おばあちゃんの家族は、戦争が終わっていることも知らず、防空壕に隠れていた。
戦車に乗ったアメリカ兵に「デテコイ」と言われたが、戦車でひき殺されると思い出て行かなかった。
手榴弾を壕の中に投げられ、おばあちゃんは左の太ももに大けがをした。
うじがわいて何度も皮がはがれるから、アメリカ軍の病院で、けがをしていない右の太ももの皮をはいで、皮ふ移植をして何とか助かった。でも、大きな傷あとが残った。
傷のことを誰にも言えず、先生に叱られても、傷が見える体育着に着替えることが出来ず、学生時代は苦しんでいた。
五歳のおばあちゃんが防空壕での歌を歌い、「艦砲射撃の食べ残し」と言われても、生きてくれて本当に良かったと思った。
おばあちゃんに、生きていてくれて本当にありがとうと伝えると、両手でぼくのほっぺをさわって、「生き延びたくとぅ、ぬちぬ、ちるがたん」
生き延びたから、命がつながったんだねとおばあちゃんが言った。
八十年前の戦争で、おばあちゃんは心と体に大きな傷を負った。その傷は何十年経っても消えない。
人の命を奪い苦しめる戦争を二度と起こさないように、おばあちゃんから聞いた戦争の話を伝え続けていく。
おばあちゃんが繋いでくれた命を大切にして、一生懸命に生きていく。